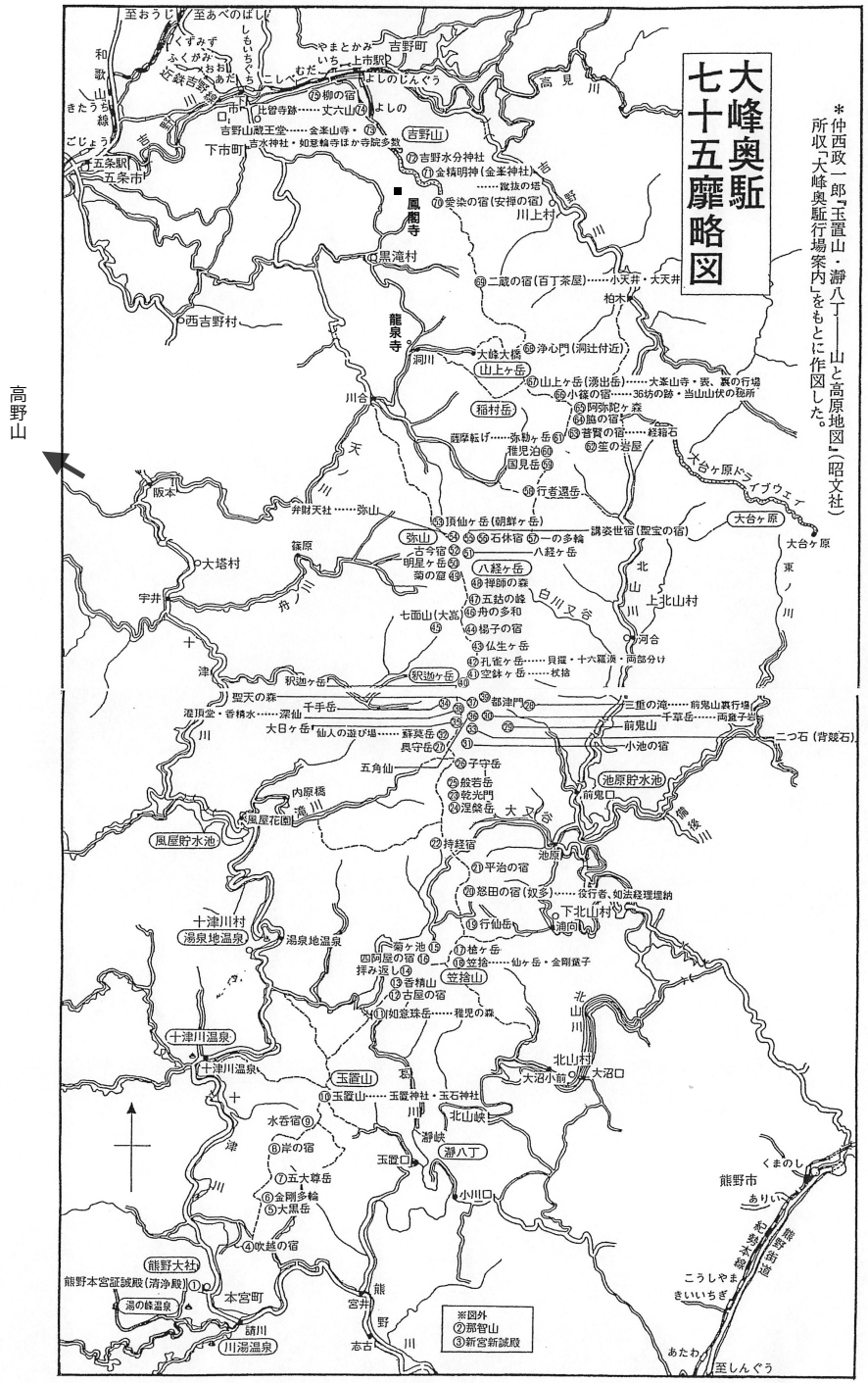


第50回先駈修行　醍青連会員行程表

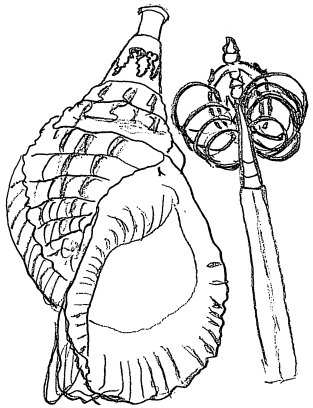
日　時	No.	地点	到着時間	出発時間	備考1	備考2	車時間
6/5	1	醍醐寺三宝院	17:00～		宿泊	夕食	※印につきましては、時間が変更となる場合が、ございます。
6/6	2	醍醐寺三宝院※	5:30	05:50	おつとめ		
（木）	3	女人堂※	6:00	6:10		登り40分	
	4	上醍醐寺務所※	6:50	7:30	諸堂巡拝	巡拝40分	
	5	三宝院※	8:10	8:30		高野山に向け出発	
	6	奥之院御廟※	11:30	12:10	おつとめ	伽藍から奥之院まで徒歩	
	7	奥之院手前の食堂	12:10	12:30	昼食		
	8	車移動	12:30	12:50		中の橋駐車場より乗車	
	9	天狗木	12:50	13:00	おつとめ		
	10	高野谷	13:10	13:40			
	11	石木谷	13:50	14:00		野川弁天手前でトイレ	
	12	野川弁財天	14:30	14:45	おつとめ		
	13	車移動	14:45	15:05		野川弁天駐車場から	
	14	広　瀬		15:05		トイレのあるカーブ	
	15	山　西	15:35	15:45	トイレ	みずはの湯	
	16	庵　住	16:15	16:20		キャンプ場	
	17	籠　山	16:35	16:45		役場	
	18	大和屋・大谷屋	17:30		夕食・宿泊	受　付	
6/7	19	大和屋・大谷屋		06:30	朝食・出発		
（金）	20	九　尾	07:25	07:35			
	21	天河弁財天社	08:00	08:20	トイレ	一般参加合流	
	22	来 迎 院	08:25	08:35			
	23	役　場	09:20	09:30	トイレ		
	24	ミタライ渓谷	10:15	10:25	トイレ		
	25	虻　峠	11:00	11:10	トイレ		
	26	洞川駐車場	12:00	13:45	昼　食		
	27	龍 泉 寺	14:00	15:30		柴燈護摩供	
	28	久保治旅館	15:40		夕食・宿泊	受　付	
6/8	29	龍 泉 寺		03:00	朝　食	昼食弁当受け取る	
（土）	30	小篠道場	07:20	08:30		柴燈護摩供	大峯山
	31	大峯山寺	09:30	11:00	昼　食	柴燈護摩供	
	32	洞　川	15:30		夕食・宿泊		
6/9	33	龍 泉 寺		03:50	朝　食		
（日）	34	鳳 閣 寺	08:00	08:50		柴燈護摩供	吉野下り
	35	蔵 王 堂	11:30	12:00			
	36	近鉄吉野駅	12:30	13:00			
	37	醍醐寺三宝院	16:30			駈出護摩後、解散	

宿泊場所

6日	大和屋	〒638-0543	奈良県吉野郡天川村和田476	TEL 0747－65－0008
	大谷屋	〒638-0542	奈良県吉野郡天川村栃尾375-3	TEL 0747－65－0009
7・8日	久保治	〒638-0431	奈良県吉野郡天川村洞川221	TEL 0747－64－0018

令和元年

醐山青年連合会創立五十周年
花供入峰先駈修行五十回記念資料



目次

一、修験道 ―― 1
補記 ―― 4
①修験道とは
②先達とは
③大峰山の歩き方
④本尊観
⑤修験数息観
⑥数息観修行作法
二、大峰山 ―― 13
三、山伏名義 ―― 15
四、山伏 ―― 17
五、役小角（人名） ―― 19
六、聖宝（人名） ―― 21
七、当山派 ―― 23
八、小篠の宿 ―― 28
九、花供の峰 ―― 30

一、修験道【歴史】

修験道は日本古来の山岳信仰が外来の密教・道教・儒教などの影響のもとに、平安時代末に至って一つの宗教体系を作りあげたものである。このように修験道は、特定教祖の教説にもとづく創唱宗教とは違って、山岳修行による超自然力の獲得と、その力を用いて呪術宗教的な活動を行なうことを旨とする実践的な儀礼中心の宗教である。

わが国では古来、山岳は神霊のいる他界として崇められてきた。しかし奈良時代になると、外来の仏教や道教の影響をうけた宗教者たちが山岳で修行したうえで、陀羅尼や経文を唱えて呪術宗教的な活動に従事するようになっていった。のちに修験道の開祖に仮託された役小角も、葛城山で修行した山林修行者の一人である。

平安時代になると、最澄・空海による山岳修行の提唱もあって、宗教僧たちも好んで山林修行を行なった。醍醐寺を創建した真言宗の聖宝、比叡山の回峰行を始めた相応などはとくに有名である。そして山岳修行の結果、加持祈禱においていちじるしい効験をあらわした密教僧は、修験者と呼ばれるようになった。修験者は山に臥して修行したことから、「山臥」と呼ばれもした。修験者はやがて、吉野の金峯山や熊野を拠点として大峯山に入り、山上ヶ岳、小篠、笙の岩屋・前鬼などの霊地で修行した。また彼らは、皇族や貴族の御嶽詣（金峯山参詣）や熊野詣の先達をつとめたりした。

鎌倉時代初期には、中央では熊野を拠点をした熊野山伏、金峯山で修行した大和の諸大寺に依拠した廻国修験者の、二つの修験集団が形成された。このうち前者の熊野山伏は、三井寺の増誉が熊野三山検校になったのを契機として、鎌倉時代末には三井寺末の聖護院を総本山とする修験教団（本山派）になっていった。

一方、後者の廻国修験者も興福寺の後だてのもとに当山派と呼ばれる教団を作りあげた。しかし室町時代中頃から醍醐三宝院の管轄下に入り、聖宝を派祖に仮託して、真言系の修験教団になっていった。また羽黒山、彦山など遠国の山岳に依拠した山伏も、それぞれ独自の宗派を形成した。修験者は中世期を通じて全国各地の山岳で修行し、また村々を遊行した。修行・呪術宗教的活動・芸能などの伝播から、はては間諜としてなど、多方面な活動を行なった。

近世期に入ると江戸幕府の政策もあって、全国各地の山伏は本山派か当山派のいずれかに所属させられた。また遊行が禁止されたことから町や村に定着し、もっぱら加持祈禱や呪法などの呪術宗教的活動に従事した。この頃には修験者の影響もあって、大峯山・富士・木曽御嶽・白山・立山・出羽三山・石鎚山・彦山など、全国各地の霊山で庶民の講による登拝がしきりに行われた。

明治五年、修験道は廃止され、本山派の修験者は天台宗、当山派の修験者は真言宗に所属させられた。このときに神職になったり、帰農した修験者も多い。

しかし第二次大戦後、真言宗醍醐派（総本山三宝院）、本山修験宗（総本山聖護院）、金峯山修験本宗（総本山金峯山寺）、修験道（総本山五流尊滝院）などの修験教団が相ついで独立し、修験道はふたたび活況を呈している。　修験道の思想や儀礼は、峰入修行による即身成仏をその眼目にすえて展開している。まず依経は、教義上は山中の森羅万象そのものを経とするというように特定の経を立てぬことを旨をする。しかし実際には、般若心経・法華経とくに普門品、本覚讃、陀羅尼、法号などが好んで用いられた。次に崇拝対象は、基本的には大日如来と金剛界・胎蔵界の曼荼羅をされているが、実際には大日如来の教令輪身といわれる不動明王やその両童子が崇拝された。また金峯山では役小角が感得した金剛蔵王権現、大峯八大童子、熊野山では熊野権現が崇められた。修験道では峰入修行が行なわれる山岳は、大日如来の金胎の曼荼羅で、山中の自然現象はすべて大日如来の説法である。そして修験者は、全体として大日如来と自己の成仏の可能性を示す衣体を身につけて山中に入り、崇拝対象を崇める。そして成仏過程になぞらえた十界修行をなし、

その最後の正灌頂で金剛界・胎蔵界の秘印を授かることによって、即身成仏しうると教えられたのである。この即身成仏するということの意味は、正灌頂をあわせて授けられる柱源供養法などによると、修験者自体が天と地を結ぶ柱になることを意味していた。

また、こうした峰入修行によって成仏したことをよりリアルに受けとめさせるために、峰中修行の際に死・受胎・母胎での生育・誕生を示す儀礼も行なわれた。峰入修行をおえた修験者は、峰中で獲得した験力を示すために、火渡り・刃わたり・護法や動物霊を使役するなどの験術を行なった。羽黒山の烏とび、吉野の蛙とびなどはこの例である。またその験力を用いて、小祠の祭り・加持祈禱・卜占・巫術・調伏・憑きものおとしなど、多様な活動を行なった。（修験道辞典より抜粋）

聖宝理源大師が寛平九年に勅を賜り金峯山を開くとあり宇多天皇を連れ吉野から大峰に入る、此の事から修験道中興の祖と祀られる、円珍智證大師が熊野で修行していたが、大峰に入った記録はなく二〇〇年後の天台宗の増誉僧正が寛治四年に白河法皇を連れ熊野より大峰山に入ったのが本山派の始まりとするが正しいであろう。

補　記

①、修験道とは（修験心鑑書より）

修行し、清浄になり智慧を得、明らかに知ること。
悟りを知り大きな道を歩むこと、悟りの道を歩む事、
人は元々清浄で、悟りを知っている只々煩悩の垢のより、悟りの道が見えていないだけである。智慧を持って、垢を取り悟りの道を開いて、ひたすら歩むそして菩提を知り「菩提行」（小乗）又、菩薩の道を帰る「菩薩行」（大乗）
清浄なる心で衆生の闇を除く、苦を抜き楽を与える。
上求菩提（白）、下化衆生（黒）
世間を離れ修行する（捨身の行）
平等を意識する修行、修行は心の徳を積む事

②、先達とは（菩薩行）

導く者。垢を除き、智慧を授ける者。良く知り良く明らかにする事が肝心
垢の除き方ー驚かす、体力を無くす、集中させる、繰り返す、懺悔、無言行
しかし、垢を嫌わず悟りを求めずの心も必要である、唯々歩く事を知る。

③、大峰山の歩き方（入峰修行前に言っている事私記）

一、先達の言う事は絶対で有ります。「安全に修行するため」
一、先達（前の人）の足元を見て同じように足を運ぶと楽に登れる。

一、無言で歩く事。（自分と向き合う）　声を出して良いのは読経の時、人とすれ違う時の大きな声で挨拶「ようおまいり」（前後から人が来てる事を知らせる意）
体調の悪い時、休憩の時
一、呼吸を意識して、体力の6割くらいを使うつもりで、リラックスして歩く事。
一、後ろを歩く人のことも考えて、石を転がさない、木の枝など引っ張らない。
一、読経の時の祈る事　1、修行が無事終わるように願う。
2、今ここに居れるのは家族が健康であることに感謝し、
周りの人達の健康や幸せを願う。
3、自分自身の願い事。
一、門や仏様の祀っている所では、入らせて頂きますという気持ちで一礼、
出る時はありがとうございましたと一礼する。
一、女人結界とは
その昔、役行者様が修行のため山に入ると、心配する母が付いて来るので危険な山に入れる事は出来ないと言ったが、それでも付いて来る母に、ここからは女性の方は入ることが出来ない聖域と母を想う愛情から言い出来上がったとされる。
ある説には女性は子を産むの苦しみを知っているが、男はそれを知らない為大峰山修行しなければならないという。
日々、母や妻など女性に世話をしてもらっている方が、女性から離れて修行する事により、炊事洗濯など女性の苦しみを知ることにより、感謝の念を生み平等を知るよう。
一、大峰山系は毎年数名の方が亡くなられている危険な山であることに気をつけ、心して入る事

④、本尊観

当山派では二種あり即ち有相の本尊、無相の本尊なり、その中で無相を以って最初の本尊とするが故に専ら自身自供養と称し、自身即仏の観想に住して自身に投華し、自身に灌頂し、自己の本仏に供するを以て無相最勝の瑜伽とす（大日経の説）

有相の本尊とは、一に峰の本尊、峰中の巌石、草木等を持って法身大日如来と観ずる。二に宿本尊として先達、新客の二柱を本尊とす。三に床本尊として山上修行たる床堅　床定と言うが如き修行時にて、我即大日の覚りを得て仏身を成ずる行者、及び仏身を成ぜしめる、例えば諸道具如きを本尊とす。（修験大要）

修験行者が駈入の夕より駈出の朝に至るまで、己が修行の成辨を祈るは不動一尊であり。其の奥秘は自身を明王と觀じ、未達の行者は明王の眷属である童子なりと観想して慈愛を垂れて修行円満を期するべきである。

大日所変の不動明王は不動一尊独一無伴の位であり、釈迦所変は不動三尊で普賢菩薩は矜羯羅童子、文殊菩薩は制吒伽童子であります。大日如来を勧請すべき修験行者が不動一尊に帰命するのは大日如来の教令輪。即ち大日如来の令旨を受けて剛強難化衆生を化益し給える故で、金剛頂瑜伽経に『教令輪とは忿怒心を現ず、大悲を起すによりて威猛を現ずる故なり』とある、大悲は愛の一面で苦しみを抜くのが主眼であるから明王は何時も奴僕三昧のお姿で活動的で有る。

此事に付いて、慧印儀軌の五重の法流の中に『法身の如来は浄土をトすと雖も己のが身の外に非らず、如来の心は自己の心なり、大慈の為に荘厳相好の形を現し、大悲の為には暴悪憤怒の形を示されている、如来は大慈大悲を共に含んでいるから果に止まらず因に向って利益を発す故に阿遮羅明王（不動明王）一尊に止まるのである』此れが聖宝尊師のお説きに成られた理智不二界会の三昧に住する由縁である。（従因至果、従果向因、非因非果）

この明王の実体は即ち阿吽の合成であって行者の呼吸、即ち気息に帰着するのである。理智不二説では智は生の法、理は滅の法、即ち阿吽合成の相は不二法、不生不滅に住する義です。此の理智不二礼讃に説くところの智には相（姿、形）を説き、理には性（本体、本質、原因、不変な本性）を説かれて居り、相は有形であるから生の法、性は無形であるから滅の法、慧印の説く所の不二の法は生滅を共に含める故に不生滅に住す。相には難苦の行を修し、性には観解の行を修するのである、物事を苦と思うものには、恐怖せしめ、物事を楽と感ずるものには総ての物の真実であることを明らかに証して下さる。（西の覗き）

理智不二の自性は不動であり、清浄であるから我とか他とかの差別なく、一体寂静なのであるから慮智戯論を犯さず、自性の体は自菩提であると感ずべきである。

不生滅は即ち不去来である（不動）即ち理智不二の自性なのです。不動如来の実体は阿吽を合して大明王を生ずるのであるから慈悲を摂持し形色は万分を具足す、故に一界の始終はこの一尊の法に備わるのである。

⑤、修験数息観

修行者の心に真理を観念する修行法として、出入の息に真言を読誦する事により、息を数えて心想の散乱を停止し心を鎮める事により、諸法の真相を証得し仏果を証するに至る数息観と言う観法がある。

修験道に於いては言葉とか念想を以って深遠の境地に接し、その真相を求める方法として真言陀羅尼を読誦する事が説かれている。真言陀羅尼は無量に差別されているが、その一つ一つは皆　如来の境地を表している。即ち阿字吽字等の文字が如来の名字名号であるこの阿字吽字等の文字を常に読誦し憶念する事により遂に法性の真実の相に参入し、この文字を通じて自在に諸法の実相を観ずる事が出来る。

この真実の相を阿字第一命吽字の命息と言うのである。吽字の命息とは、一切の物を貫いて永遠に生き抜いている生命の当体にして、即ち行者が吽字を読誦する時、阿吽の出入の息風は如来の光明に照らされて、金剛堅固の体となり、宇宙を貫く生命体である如来の境地を通じ仏果を成ずるに至るのである。如此く此の吽字は一切如来の真実の妙体で有り、凡ゆる功徳は皆此所より生ずる根源である。

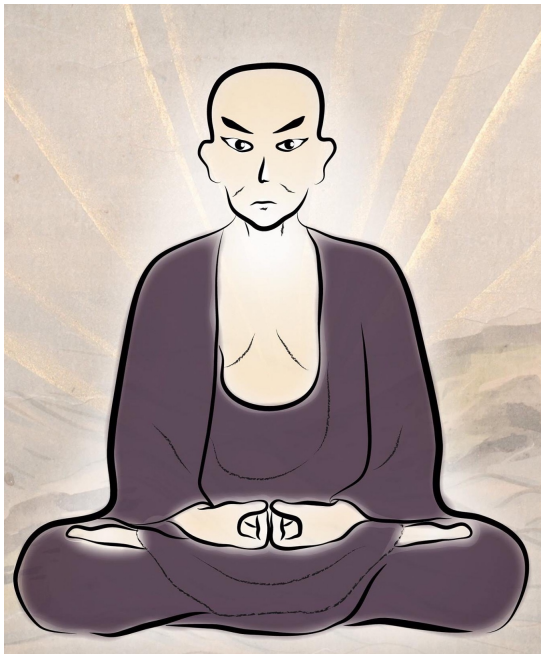
次に阿字について言えば一切諸法は因縁より生じ損滅増益がある。爾してその因縁を生ぜしめるものは、修行者の心中に我見我慢等の闇黒の心が連続して止む事なく正起し、それがため一切の悪業を表現し続けるに至る。これが修行者の真知を悩ます根本原因である。即ち無明と云う迷妄の根源に覆われているがため、何時迄も迷路より脱却する事が出来なく、諸法の実相を知る事が出来ない。

然らば此の無明を除くには如何にすればよいのか、それは修行者の絶え間なき修行により、諸法の真実の相を照了する明智を獲得する事である。即ち如来の功徳宝所を開示する智慧を得る事である。この智慧によりこの迷妄を脱却した時、その処に表れた真知は修行者の心内奥深く存ずる仏性、即ち如実知自心であり、阿字諸法本不生不可得の境地である。之を一切智々と云いそれを体現するものが大日如来である。

この阿字諸法本不生不可得の本源は如何なる物をも創造し、又凡ての物の所依であり、因縁の事相に囚われる事なく自在に大悲の行を施している。即ち修行者の観法の修行により本尊の境地と相応すれば、生死を超えた永恒の生命に生きる不生不滅の本不生不可得の境地を逮得する事が出来る。

此くて修行者が今床堅に住して阿吽の二字を息風に觀じ、度重なる数息観の修行に於いて、阿字吽字の真言読誦を重ねる事により、迷妄に囚われない永遠の生命としての阿吽の二字を観察し、諸法本不生不可得の義に徹し、自身即仏の大果を成ずる事が出来ると共に、修行者自ら他の一切を仏果に導かんとする永遠の生命として隅なく世間を照す金剛堅固の如来の体証を成ずる事が出来る。

数息観により凡身の修行者が無量の煩悩に悩まされる事なく心身共に安楽の境地に安住し、如来の広大なる大慈悲の感応を受け、現身に於いて仏果を証し金剛堅固の仏身を成ずる事が出来る。茲に数息観に依る仏身成就のため度重なる修行が修せられる所以である。



⑥、数息観修行作法

着座。普礼。次に結跏趺坐法界定印を結び臍前に置き、静かに目を閉じ阿吽の二字を観察する。吐く息に阿字を発し、吸う息に吽字を発す。

次に字輪觀 観想せよ、本尊の心月輪の上に阿吽の二字あり、阿字諸法本不生不可得なり。吽字因業不可得なり。又自身の心月輪の上に阿吽の二字あり。本尊の誦し給う阿吽の二字が本尊の御口より出でて我が頂上より入って心月輪の上に至って住す。我が誦する真言の字が口より出でて本尊の臍輪より入って心月輪の上に至って住す。

此くの如く観じて徐々として阿吽の真言百八遍を誦す。即ち行者の自身は一切如来の真実の好体に同等にして如來身を成ず。

次に八句文。次に床堅に住す。次に大日如来真言オンアビラウンケンソワカ七遍。

我即アビラウンケン、如次腰腹心額頂、不改自身名即身、覚悟此分為成仏。

二、大峯山【山名】

奈良県吉野山から和歌山県の熊野に至る紀伊半島の中央に約四三里にわたって長くのびる山系。古来修験道の根本道場として知られている。主要な峰には、大天井ヶ岳、山上ヶ岳、稲村ヶ岳、龍ヶ岳、大普賢岳、国見岳、行者還岳、弥山、八経ヶ岳（最高峰、一九一五m）、明星ヶ岳、七面山、仏生岳、釋迦ヶ岳、大日岳、地蔵岳、行仙岳、笠捨山、玉置山などがある。これらはいずれも一〇〇〇mを越える高峰である。この山系の西に十津川（下流は熊野川）が流れ、東には吉野川が流れています。峰からこの両側に注ぐ沢には滝や窟が多いが、峰から峰への台地上は比較的平坦な道が続いている。この吉野から熊野への道は修験道の峰入道で、途中に大峯七十五靡と呼ばれる七五ヶ所の霊地がもうけられていた。

北端の山上ヶ岳は現在も女人禁制の霊地として知られている。この山上ヶ岳には金剛蔵王権現を本尊とし、役小角をもあわせて祀った大峯山寺がある。また鐘懸、お亀石、西の覗などからなる表行場、胎内くぐり、平等岩、元結払などからなる裏行場、そして大峯山寺の護持院の吉野の東南院、喜蔵院、桜本坊、竹林院の宿坊がある。山上ヶ岳から少し下ったところにある小篠の宿は当山派修験の拠点で、役小角の祀った小堂と護摩道場がある。

この山上ヶ岳、小篠を支えた集落が、役小角の弟子後鬼の子孫といわれる洞川（吉野郡天川村）で、ここには真言宗別格本山龍泉寺がある。

大峯山中のほぼ中央の弥山には、天川弁財天社の奥ノ院がある。この社は吉野熊野宮ともいわれ、弥山は天川部落によって支えられている。また弥山から約一〇キロのところに釋迦ヶ岳があり、山頂に釈迦如来の銅像が安置されている。この下の鞍部が本山派修験の灌頂道場で、大峯山中台ともいわれる深仙である。深仙近くには大日ヶ岳などの行場がある。この深仙を守って活躍したのが前鬼部落の修験である。前鬼の近くには、三重の滝、金胎窟、天の二八宿などからなる前鬼裏行場がある。前鬼の南には持経宿、笠捨山、玉置山などの霊地がある。とくに玉置山は熊野本宮の奥ノ院といわれる霊地である。ここからさらに熊野本宮、熊野川を下り、新宮から海岸に沿って那智へと道場がのびているのである。

大峯山は伝説では役小角が修行して金剛蔵王権現を感得し、のちに平安時代になって醍醐三宝院を開いた聖宝が中興した修験道場といわれている。平安時代末頃には、、この大峯への入口にあてる熊野と吉野の金峯山（山上ヶ岳）が修験者の拠点として栄えていた。鎌倉時代末になると、このうちの熊野の修験者達は聖護院と結びつき本山派と呼ばれる宗派をつくった。

一方室町時代末には大峯山中の小篠に拠った修験者たちは当山派と呼ばれる宗派を形成した。本山派は熊野から吉野へと峰入し、当山派はこの逆のコースをとった。前者を順峰、後者を逆峰を呼んでいる。もっとも中世末以降はほとんど逆峰であった。近世中期以降になると、庶民たちが講を結んで大峯山に登るようになった。ただこれらの講は、吉野から熊野への奥駈けよりも、むしろ山上ヶ岳のみに登ることの方が多かった。なお、教義の上では大峯山は金剛界・胎蔵界の曼荼羅とされ、この山で修行することによって即身成仏しうるとされている。（修験道辞典）

三、山伏名義【思想】

修験者を意味する山伏（やまぶし）、修験（しゅげん）、客僧（きゃくそう）の通称にもとづいて、その宗教的性格や、修験道の教義をとくことから、教義では「三種名義」と呼んでいる。なお、やまぶしには「山伏」のほか、「山臥」の表記も用いられているため、この両者を立てて四種として、「四種名義」とも呼んでいる。「山伏名義」は、室町時代末頃、修験道の教義書でとかれ、以後しばしば用いられている。これらの言葉は語義のうえでは、やまぶしは山に臥し野に臥す宗教者、修験は山岳修行により呪験を修めて効験をあらわす者、客僧は諸国を修行・遍歴する者を意味している。しかしながら、修験道では「所修の理法に依って能く修行者の名字と為す」（『修験三十三通記』）というように、これらの名称が修験道の教義

に即して意味づけられている。すなわちまず山伏は、能詮・所証不二の名義とされている。もっとも「四種名義」をとく場合は、山伏と山臥の二つを対比させて、山伏は、始覚修生・従因至果、山臥は本有本覚・従果向因を示すとしている。すなわち「山伏」は、修行によって悟りを得るものをさし、「山臥」は本来悟りの性すなわち凡聖互具の性格を所持していることを示している。また、やまぶしの二種の表記である「山伏」と「山臥」がそれぞれ始覚と本覚とされるため、やまぶしは始本相対の存在とされている。なお修験道では、この山伏と山臥の「伏」と「臥」の字義の違いを記した切紙「臥伏二字之事」が作られている。次に修験は修行者が自分自身本有本覚六大法界であることを知り、修行によってその六大法界本有の性得を実証することをさしている。また修は始覚、験は本覚で修験者がこの始覚・本覚の修行を双修すべきことを示すともいわれている。一方、客僧は諸山を遍歴して定住することをしないことから、一切のものに執着しない存在とされ、その境地を始本不二としている。このように山伏名義では、「やまぶし」は山伏が始覚で山臥が本覚ゆえ始本相対、修験は修は始覚で験は本覚ゆえ始本双修、客僧は執着しないゆえ始本不二というように、天台本覚思想を借りることによって修験者が修行の結果、絶対不二の境地に達することを説明しているのである。（修験道辞典）

四、山伏　【組織】

修験道の宗教的指導者。山臥とも書き、修験者ともいう。山野に伏して修行し、験力を獲得したことから、山伏または修験といわれた、山伏は頭巾をいただき、鈴懸を身にまとい、法螺を吹き、笈を背負うという独特の衣鉢をする。山伏は奈良時代の卓越した山林修行者である役小角を伝説上の開祖とし、平安末期までには全国各地の主要な山岳ごとに集団を形成した。なかでも出羽三山・立山・白山・戸隠・大峯山・葛城山・石鎚山・大山・英彦山・宝満山などが有名である。これらの山々に依拠した山伏は、のちに天台系の本山派と真言宗の当山派に包摂され、本山派は聖護院、当山派は醍醐の三宝院が統轄した。

山伏は山岳修行の結果、仏としての力（験力）を獲得したと称して、加持祈禱・調伏・憑きもの落しなどの呪術宗教的活動を行ない、庶民の宗教生活に大きな影響を与えてきた。山岳を中心とした地理に明るいことから、中世には徒党を組んで威勢をはり、政治・軍事にも関係し、戦乱の際に大きな役割を果たした。また源義経・弁慶のように、身の安全をはかるために山伏に姿を変えることも行なわれた。

なお、修験道の教義では山伏の二字を説明して、「山」の縦三画と横一画は三身即一・三部一体・三諦一念を示し、人偏と犬からなる「伏」は煩悩即菩提無明法性不二を示すとしている。また山伏の字は修生で従因至果、山臥の字は本有で従果向因を示すともされている。（修験道辞典）

五、役小角　【人名】

七～八世紀ごろ、大和の葛城山にいた宗教者。のちに修験道の開祖に仮託され、役優塞・役行者・行者さん・神変大菩薩と呼ばれて崇められた。役小角に関する正史の初出は、『続日本記』の文武天皇三年（六九九）五月二四日条のものである。それによると、役小角は葛城山に住んでその呪術が広く知られていた。しかし、その能力を妬んだ弟子の韓国連広足が、小角が妖言をもって人々を惑わしていると讒言したために、朝廷では彼を伊豆島に配流した。世間では小角は鬼神を使役して水を汲み、薪をとらせ、もし命令に従わないときには呪縛したという。

なお小角は、当時葛城山麓で勢力をふるった加茂氏の出身であり、その弟子とされた韓国連広足はのちに宮廷の呪禁師となり、外従五位下の位をあたえられた人物である。この広足が小角の弟子となっていたことからみても、小角が当時優れた宗教者として広く知られていたことがわかる。

小角はすでに奈良時代から傑出した呪術者・験者として伝承化されていたようで、『日本霊異記』には葛城山の岩窟で修行して孔雀明王の呪法を修め、鬼神を使役して大和の金峯山と葛城山との間に橋を架けさせようとした。しかし、これに従わず小角に呪縛された葛城山の一言主神の讒言で伊豆島に配流された。

のちに許されたが仙人となって飛び去り、道昭が新羅で法華経を講じた席に現れたとの話がのせられている。やがて平安時代の末から鎌倉時代になって大峯山や熊野などに修験者の拠点が作られると、役小角は彼らの理想とする修行者として崇められ、役行者と呼ばれるようになっていった。そして役行者が大峯山中で七度も生まれかわって修行した、母のために千塔を造立して供養し、その旨を記した縁起を神仙の三重の岩屋におさめた、金剛蔵王権現を湧出させて修験道の本尊とした、種々の穢れを払って熊野に参拝した、などの伝承が作られた（『諸山縁起』）。

やがて鎌倉時代末から室町時代になって修験教団が確立すると、役行者は修験道の開祖をされ、その本年は大日如来で、母が独鈷を飲んだ夢を見て受胎し、成人後は箕面山で龍樹菩薩から秘法を伝授せれたとの神話が作られた。また各地の修験霊山では、役行者を開山とする縁起が作られた。

そして室町時代末には、役行者の本縁、出生、箕面受法、蔵王権現感得、二鬼随従、諸山巡錫、伊豆配流、形像などを記した本格的な伝記『役行者本記』が成立した。また、頭巾をかぶり袈裟をかけ、手には錫杖と経巻を持ち岩窟に腰かけ、前鬼、後鬼を従えた像も作られていった。江戸時代に入ると、『役君形生記』『役行者顛末秘蔵記』『役君伝記』『役行者霊験記』『役公徴業録』『役行者御伝記図会』など、数多くの伝記が著わされた。また講式や和讃も作られ、その供養の法会や追善の法要が盛んに行なわれた。大宝元年6月7日没

そして寛政八年（一七九九）の一千百年の御遠忌には、神変大菩薩の諡号が授けられ、それ以後、現在まで「神変大菩薩」として崇められている。（修験道辞典）

六、聖宝【人名】

理源大師。当山派修験の祖と仰がれた平安初期の真言僧。天長九年（八三二）京都に生まれた。父は兵部大丞葛声王で、天智天皇の孫春日親王の、四世の後胤にあたる（元明天皇の後胤、兵部太輔葛野王の子とも）。幼名は恒蔭王。承和一四年（八四七）空海の実弟真雅に従って出家し、元興寺願暁と円宗から三論を、東大寺平仁から法相を、同寺玄永より華厳を、それぞれ学んだ。またこの頃、金峯山で修行したと推定されている。貞観一一年（八六九）三八歳のときに維摩会の竪義を勤め、賢聖義および二空比量の教説を立て、主として三論の立場から衆議を論破した。

その後京都にもどって真言密教の修行につとめ、貞観一三年（八七一）師真雅より無量寿法を受学、一六年に密乗修行の道場として醍醐寺を創建。翌年東大寺に東南院を興し、三論真言兼学の道場となした。元慶四年（八八〇）高野山に登り真然より両部大法を受け、元慶八年(八八四)東寺において南池院源仁より伝法灌頂を授受、仁和三年（八八七）この灌頂を公認されて伝法阿闍梨位を授かった。

こうして、三論宗を主とする南都教学ならびに真言密教を修めて阿闍梨位に達し、以後宗教界の中心人物となった。すなわち寛平二年（八九〇）貞観寺座主に任ぜられてから京都仏教界の主力となり、同七年（八九五）に東寺二長者、延喜元年（九〇一）に大僧都、延喜二年（九〇二）権僧正・東大寺別当、延喜六年（九〇六）に僧正・東寺一長者に進み真言教界の最高位を占めるに至った。同九年（九〇九）七月六日 深草普明寺にて病没。とくに事相にすぐれ、日食や祈雨の修法に験力を示したといわれ、実際に「七日御修法」や「孔雀経法」などの修法を行なった記録もある。また聖宝の法流は観賢・淳祐・元杲を経て、仁海（九五五～一〇四六）の時代に小野流に統合された。（小野は醍醐寺の北に隣接）小野流は醍醐寺を拠点としたため、開山者聖宝を派祖とした。

なお修験道界では、一般に聖宝は当山派の派祖・大峯の中興者、恵印院灌頂の始修者とされる。まず大峯の中興伝承は、大筋は聖宝が大峯山で大蛇を退治し、役小角以来絶えていた峰入を再興させたとするもので、中世に成立した伝承である。さらに、大峯を中興した聖宝がそこで役小角に出会い、小角に導かれた聖宝が龍樹菩薩から小角をへて理智不二の秘密濯頂を授けられたという霊異相承と恵印濯頂の始修伝承も知られている。

これは近世当山派が、昌泰二年（八九九）の吉野鳥栖鳳閣寺における聖宝始修の恵印灌頂を正当化しようとして創作した伝承であろう。しかし、この吉野での灌頂自体、史実であるか疑わしく、近世期の創作であるとも考えられる。このように聖宝に関する種々の伝承は、当山派修験の形式にともないその都度、創作・変形されたものと考えられる。宝永四年（一七〇七）理源大師の諡号を賜った。（修験道辞典）

七、当山派【組織】

天台系本山派とともに日本の修験道界を二分するほどの勢力をもった真言密教系の修験宗派。本山派と同様、金峯山・大峯山・熊野三山・葛城山を修行の根本道場とした。

聖宝（理源大師）の金峯山復興と入山修行を契機に集団が形成されたので、聖宝を派祖とする。役行者の大峯科　後大蛇が出現して山伏道が断絶したが、寛平七年（八九五）に聖宝がこれを退治して入峰を再興したとか、昌泰三年（九〇〇）四月吉野郡鳥住百螺山真言院鳳閣寺で聖宝が峰授の秘密濯頂式を行ない、弟子たちに修験の法を伝えたとされるが、定かでない。しかし、いつのころからか聖宝の流れをくみ聖宝の跡を慕う近畿地方の真言系山岳寺院の修験者たちが相寄って「当山方大峯正大先達衆」の仲間集団を結成した。それぞれ諸国に同行袈裟下修験を支配し、これを引率して毎年金峯・大峯から熊野三山、葛城山へと集団入峰し、峰中儀式を執り行ない、袈裟・諸官位を免許し、一派を維持・経営した。聖宝の聞いた醍醐寺あるいはその塔頭三宝院が主導的立場で当山派を組織したとする説もあるが、それを証明する資料はない。当山大峯正大先達は、聖宝が大蛇を退治したのち三六所の先達を選んで入峰せしめたもので、醍醐帝の勅願寺であったとも伝えるが、聖宝の時代に三六先達あったとすることには疑問がある。しかし、大和郡山市の松尾寺に所蔵される大峯正大先達仲間文書によれば、一六世紀の中ごろから後半にかけて、ほぼそれに近い数の先達寺院が大和を中心に紀伊・和泉・摂津・山城・近江・伊勢などに拡がって散在していたことが知られる。

それが、近世に入って休職するものが続出し、延宝七年（一六七九）には大和の三輪山平等寺・内山永久寺・菩提山正暦寺宝蔵院・超昇寺・高天寺・霊山寺・松尾寺・吉野山桜本坊、紀伊の高野山金剛峯寺行人方、近江の飯道寺梅本院・同寺岩本院、伊勢の世義寺の一二先達となり、以後幕末までその面々で継続される。

当山派は上記の大峯正大先達仲間で運営されていたもので、中世においてその上に立つ法頭はなかったが、慶長年中、本山派と袈裟争いが起きたのを機会に、当山先達衆は自派を有利に導くため醍醐寺三宝院門跡義演准后に取り入り、その折衝方を依頼した。諸先達仲間がこのときはじめて棟梁に願ったのだといわれている。

慶長一八年（一六一三）五月二一日、駿府において徳川家康が裁断し、修験道は前からのように筋目によって入峰すべきでありまた当山・本山はそれぞれ別派であり諸役など互いに混乱してはならないという掟を三宝院、聖護院両門跡を通じて発令した。同年六月六日に秀忠も同文の掟書を出している。このことは、結果において当山派の法頭は三宝院門主であることを容認することとなった。

以後、三宝院門跡は当山派の棟梁として大峯正大先達衆の上に君臨し、一派を取り仕切ることになる。大峯正大先達出職者は、毎年大峰の夏の花供峰と秋の逆峰の二峰に参加することを義務づけられていたが、入峰度数に応じて先達の席次がきめられ、峰中諸儀式を執行した。

席次は一年ごとに次第昇進するもので、最後は仲間の重立である三ノ宿、二ノ宿、次いで一臈の大宿を勤め、退職する。先達数の減少した近世においてはこの形はとれなくなり、同一人が長年にわたって同一座位にとどまることになる。大宿は舒明天皇の勅印、二ノ宿は役行者の霊印と称するものを相承し、逆峰入峰のとき大峯の秘所小笹において、官職補任状の実名の下にこれを捺して許した。法頭を戴いた近世には、三ノ宿が聖宝の印（または三宝院門跡の印ともいう）といわれるものを持ち、これを加えた三判を三宿の実名の上に捺して許可するようになった。諸先達は各自の袈裟下修験を諸国に持ち、それらを引率して大峯に集団入峰し、峰中儀式を執り行なったのち先達仲間として官職を与える形をとった。

寛文八年（一六六八）七月、三宝院高賢准后は三宝院門跡としてはじめて大峯山に入峰したが、これを機に門跡が醍醐において出世諸官位の補任を免許するようになった。諸先達はこれを「居官の補任」と称し、その中止方を申し入れたが聞き入れがなく、さらに門跡は山伏極官の先達法印が着用する磨紫金袈裟を許すようになる。元禄期になると、諸国修験の中にこれまでの袈裟頭、帳元のほかに中老職を設けたり、三宝院が独自に袈裟筋を吟味したり人別に役銀を徴収したりした。

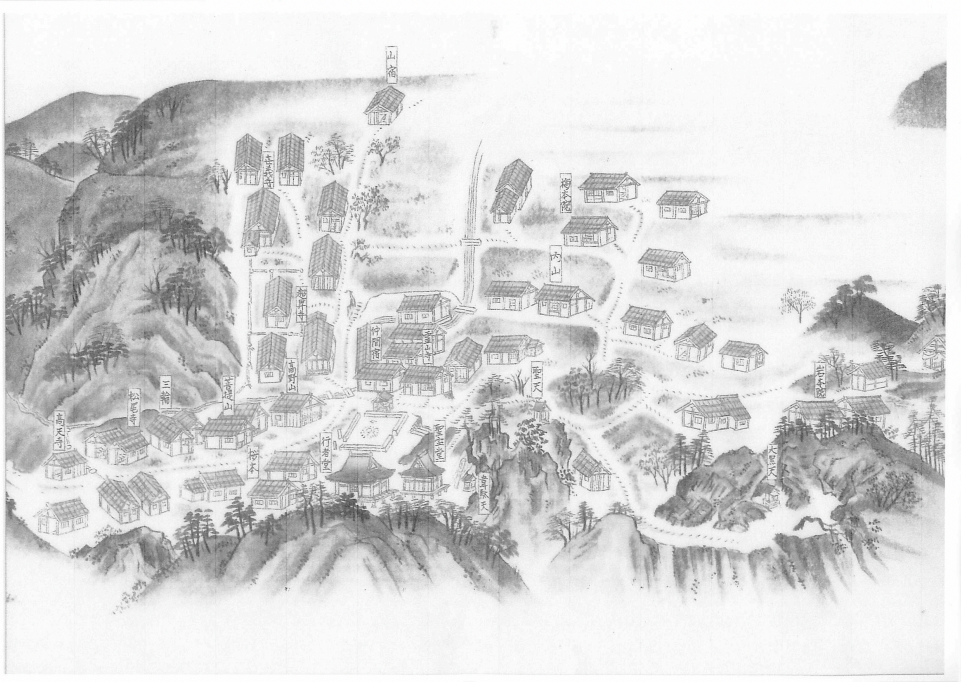
そして元禄一三年（一七〇〇）七月、高賢は二回目の大峯入峰をしたが、その前年、江戸戒定慧院俊尊を直袈裟に転じ、和州鳥住村百螺山鳳閣寺の住持職を仰せつけ、今後の衣躰および座席などを正大先達並とした。この後戒定慧院は鳳閣寺を名乗るが、これによって江戸鳳閣寺を諸国総袈裟頭とし、鳳閣寺下知をもって当山方修験の差配、修験道の諸法式、公事の沙汰まで執り行なわせた。したがって三宝院直末の修験も生まれてくるが、総体的にみて正大先達衆と三宝院門跡の両方から諸官位の免状をもらう修験が多くなる。

三宝院を大本寺、正大先達寺院を中本寺などともいうが、当山派は複雑な二重の支配構造を持つことになった。なお当山派には古来、伊勢方・熊野方・地客方と称される三派があった伊勢方は伊勢世義寺の門徒で専ら神子・守子のことを掌り、熊野方は古くは熊野願と称されたもの、地客方は国峰の国先達について年度昇進する山伏をいった。

正大先達衆は、幕末から明治の初めにかけて醍醐寺山内の中性院や松尾寺真如心院が新たに加わり、また中絶した内山先達の跡を松尾寺福園院が継ぐなど、新たな動きも見られたが、明治政府の神仏分離政策で大きな打撃を受け、明治五年九月の修験宗廃止令で解散を余儀なくされた。（修験道辞典）

八、小篠の宿【地名】

大峯七十五靡のうち六六番目の靡。奈良県吉野郡天川村大字洞附字小篠にある。標高一一一六メートル。山上ヶ岳から熊笹の茂る尾根道を約五キロほど進むと丘陵上の台地にある小篠にいたる。大峯寺の奥の院にあたる。この地は、当山派修験の祖聖宝が役行者の手引きで龍樹から秘法を伝授された土地とされ、当山派では峰中最大の霊地とされている。帝相仏・剣光童子の宿所とされ、近世期には当山派逆峰の灌頂所として本堂・祖師堂・行者堂・先達宿坊など四〇を超える坊が建てられていた。また近くには護摩場・大黒天・茶吉尼天・慈童子・胎内の岩屋などの行場がある。



当山派では修行成就の山伏に交付される袈裟・官位などの免許をここでわたしていた。近世期には本山派もここを行場とするようになり、峰中最重要の拠点として栄えた。現在は堂坊は退転し、行者堂を残すのみとなっている。小篠の宿の近くには、役小角が法華経をおさめた経筥石のある「普賢の宿」（六三番目の靡）や日蔵をはじめ数多くの修験者が冬籠りした有名な「笙の岩屋（窟）」（六二番目の靡）などがある。（修験道辞典）

九、花供の峰【儀礼】

春から夏にかけて行なわれる峰中の霊地に花を供える峰入をいう。初期の花供の峰は近世期に当山派が行なっていたもので、吉野郡洞川の龍泉寺から山上ヶ岳に登り、山上蔵王堂を経て小篠に至り、洞川または吉野に出峰するもので、四月晦日、当山派諸先達および山伏は龍泉寺に集合し、一週間ほど精進の参籠をした後、五月六日より一一日まで山上ヶ岳に登山し、諸堂に勤行供花したものである。もっともこれは、鎌倉時代末に金峯山で行なわれていた五月九日出峰の花供山臥峰入の流れをくむものと考えることができる。なお現在、醍醐三宝院では六月七日に出立し、洞川龍泉寺を経て小篠へ至る花供入峰を行っている（修験道辞典）

明治四十四年六月二日三寶院門跡四十二代和氣宥雄大僧正が花供入峰を再興される。